

知財業務 × AI：『Can / Trust / Own』で描く業務設計論

知財業務においてAIに「何を、どこまで任せるか」を判断するための3つの評価軸を提示し、AIを「使う」のではなく「育てる」組織的な業務設計の重要性を伝える。

知財AI活用の3つの評価軸

Can（その業務はAIが実行可能か）

単なるモデルの性能だけでなく、セキュリティ環境、社内環境、適切なデータベースへの接続、例外時のエスカレーション体制を含めて判断します。



単なるモデルの性能だけでなく、セキュリティ環境、社内環境、適切なデータベースへの接続、例外時のエスカレーション体制を含めて判断します。



一度の銀行で判断せず、適宜条件での構築、試みの分類、プロンプト改善のループを回し、使用できる水準に到達するかを段階的に評価します。



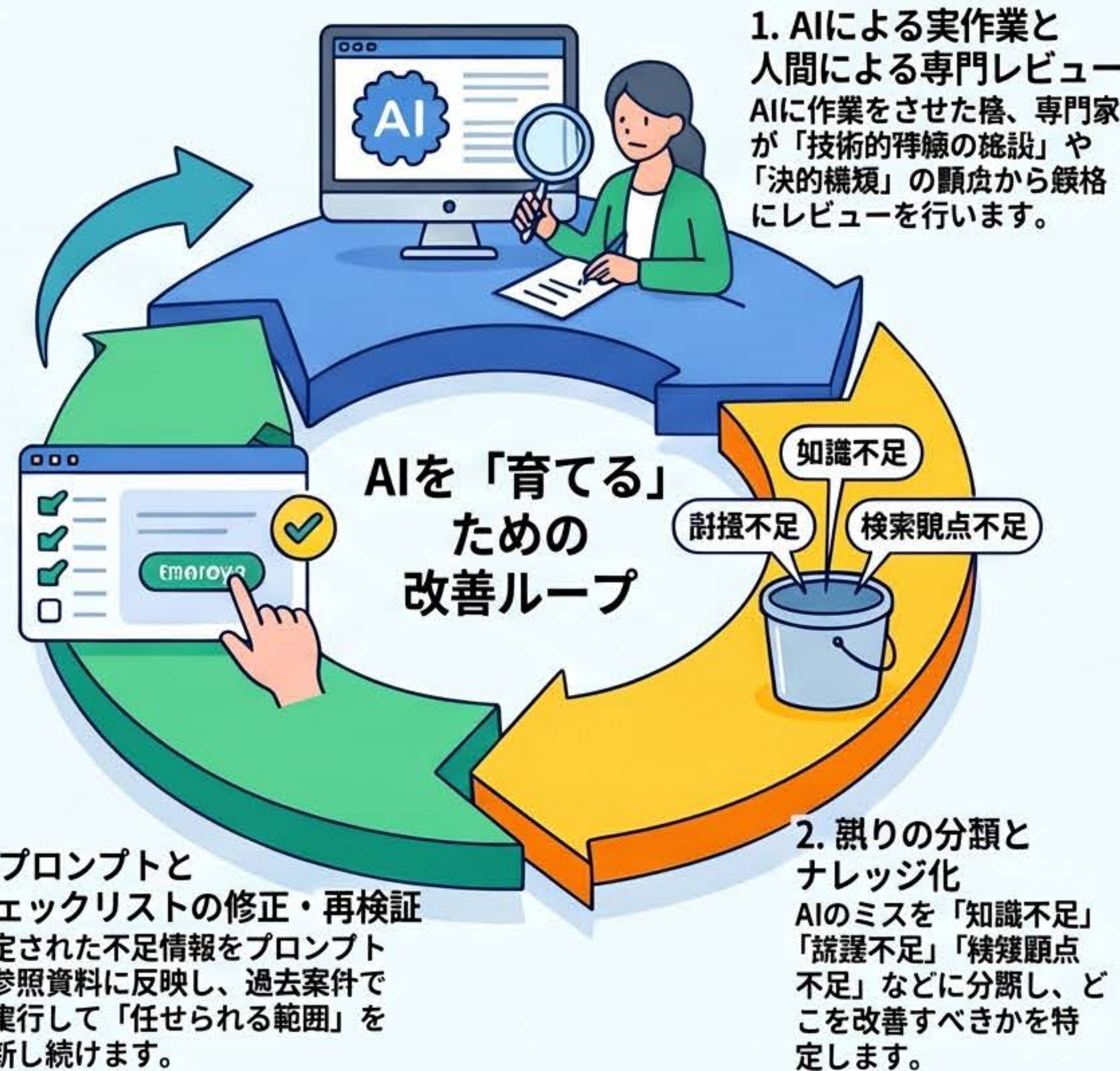
AIの出力をそのまま担じる「代替型」か、人間が最終判断する「補完型」かを区別し、ミスが修正された際の説明責任と承認ルールを明確にします。

組織としての責任設計（Own）

経営層（許容範囲の設定）、知財責任者（責任範囲）、AIマネージャー（改善ループ管理）、現場担当者（入力運営と出力確認）の4層で責任を分散します。



AIを「育てる」ための改善ループ



3. プロンプトとチェックリストの修正・再検証
特定された不足情報をプロンプトや参照資料に反映し、過去案件で再実行して「任せられる範囲」を更新し続けます。

1. AIによる実作業と人間による専門レビュー
AIに作業をさせた際、専門家が「技術的瑕疵の指摘」や「決定的瑕疵」の観点から厳格にレビューを行います。

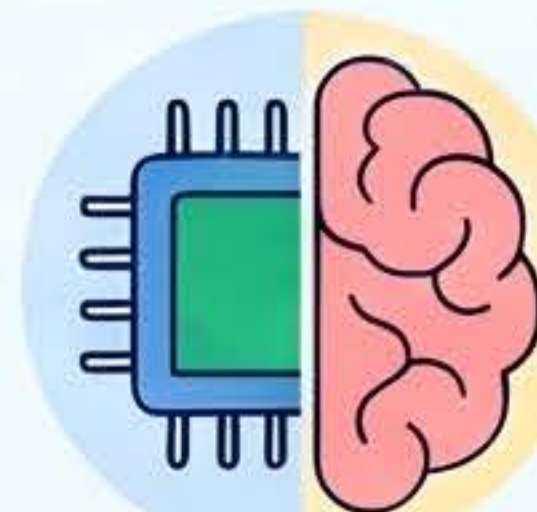
2. 熟みの分類とナレッジ化
AIのミスを「知識不足」「読解不足」「検索観点不足」などに分類し、どこを改善すべきかを特定します。

入力情報の区分管理



業務別のAI活用レベル

「判断の前段階」はAIが得意



「リスクを取る判断」は人間が担当

主要な知財業務におけるAIと人間の役割分担

論点整理や要約、候補出しは積極的にAIを活用すべきですが、出願可否や権利範囲の確定といった最終判断は人間が責任を持つべき領域です。

AIに任せやすい部分（補助向き）	人間が見るべき部分（裏面判断）
発明提案書整理 課題・効果・実施例の 抽出、質問事項の 抽出	発明の本質把握、 出願可否の判断
先行技術調査 関連文献の抽出、 対応箇条書き	重要文献の見落とし確認、 調査打ち切り判断
中間処理 権利範囲分析、反論準備、 権利化作成	補正の最終判断、 権利化の最終判断
知財契約 素案の作成確認、 リスク抽出	交渉方針の決定、 相手方の力関係の考慮
知財契約 権利範囲の洗い出し、 利用条件の整理	交渉方針の決定、 相手方の力関係の考慮
要件整理 権利範囲の洗い出し、 利用条件の整理	侵害判断、 外部利用の最終可否

